



POLE

北海道ポーランド文化協会会誌
第67号 2010.9.1

発行

北海道ポーランド文化協会

〒011-0032

札幌市北区北 32 条

西 5 丁目 2-31-902

佐光伸一

電話・FAX 011-790-8610

1994 年から 2002 年まで本会第二代会長を務められた谷本一之先生は、昨年 7 月 19 日に逝去されました。一周忌にあたり改めて、会の活動への先生

谷本一之先生の 一周忌によせて

安藤 厚



られました。1980 年代には、20 世紀はじめに樺太(サハリン)で写真機と蠟管蓄音機によってアイヌとウィルタ(オロッコ)の資料を収集した

の多大なご尽力に深い感謝をささげ、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

谷本会長の時代、会の活動はたいへん活発で、ポーランド語講習会(第 17 期～第 30 期)、ポーランド訪問旅行(第 1 回 1994 年 9 月、第 2 回 1997 年 10 月、第 3 回 2001 年 8～9 月)、池田町修学旅行(第 1 回 1995 年 9～10 月、第 2 回 1996 年 10 月)、創立 10 周年記念コンサート(1996 年 11 月)など大きなイベントが次々と催されました。



クラコフのチャルトリスキ美術館。レオナルド・ダ・ヴィンチの「白豹を抱く貴婦人」の前で夫人と。(第 2 回ポーランド旅行 1997 年 10 月)

特に第 2 回ポーランド訪問旅行には谷本会長もご夫妻で参加され、総勢

30 人近くで、ワルシャワ、ジェラズヴァ・ヴォラ、ウッチ、クラクフ、グダンスクなどを巡り、たいへん楽しく思い出深い旅になったと聞きます。

谷本先生は、1958 年に北海道大学大学院教育学研究科修士課程を修了、北海道学芸大学助手を振り出しに、北海道教育大学教授同学長を歴任されました。

バルトク研究および知里真志保博士の下でアイヌ芸能の研究から出発され、ハンガリー、ジプシー(ロマ)、アイヌや、シベリア、カムチャツカ、アラスカなどの少数民族の音楽の研究で多くの業績を上げ

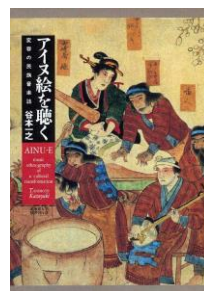
ポーランドの人類学者ブロニスワフ・ピウスツキ(1866-1918)の蠟管資料研究プロジェクトに参画、蠟管に録音された音楽資料の分析に携わられました。

本会会長をお引き受けいただけただけのも、このようなお仕事のご縁かと推測されます。毎年秋の総会で静かに座っておられた温厚なお人柄は今も深く印象に残っています。

本会会長を退かれたあとも、多くの重要な職責を果たされる一方、ロシア、アラスカなどでのフィールドワークを精力的に進められました。つい数年前、北大構内の循環バスの中でたまたまお目にかかったときの若々しいお姿が今も鮮明に記憶に残っています。

谷本先生の早すぎたご逝去を改めて悼み、ご冥福をお祈り申し上げます。

あんどろ あつし(会長/北海道大学名誉教授)



◆ 主著 (左から)

「アイヌ絵を聴く：変容の民族音楽誌」

(北海道大学図書刊行会, 2000 年)

「北方民族歌の旅」(北海道新聞社, 2006 年)

「オーロラの下に生きる人々：北の館長エッセイ」

(共同文化社, 2009 年)

齋田道子(写真提供=さいだみちこ)

ポーランド大使館に感謝！



一等書記官
ラディック氏の解説付「カティンの森」上映会 (かでる2・7)

昨年2月には、『カティンの森』の試写会の企画を提供して下さった駐日ポーランド共和国大使館。劇場公開に先駆け、一等書記官のラディックさんの解説付でとても充実したものだった。参加者の関心の高さは議論としても現れた。

また、今年「ポーランド・デー in 札幌」(第3回定例ポーランド・デー)が2月に開催され当協会のメンバーが招待された。「さっぽろ雪まつり」にあわせ在日大使がご来札され、イベントの一環で、映画『ニキフォル-知られざる天才画家の肖像-』の上映会があった。

この映画の見所はクリスティーナ・フェルドマンという86歳の女優が「寡黙で頑固な男性画家」を演じていたことだったが、全く不自然さが感じられない。孤高の画家だったニキフォルの生涯を、ことさら劇的に描くわけでも、何かを激しく訴えるわけでもない。「こんな画家が、ここにいました」と、ポーランド南部の美しい自然を背景に、一幅の絵のように静かに切り取る。

観客はニキフォルが描いたキャンバスの中に、知らぬ間に入り込んだ気分になる。実在した人物像のもつ凄みとラストの曲は、とてもスラヴ的で気持ちを高めへ連れて行ってくれた。終わったあと数人で、狸小路の「コーシカ」でウォッカを舐め、ロシアン・ティーを飲みながら夜更けまで話しこんだ。

§

その翌月、ドキュメンタリーを数多く手がけている(www.procinema.plの創設者)ヴァルデマル・チェホフスキ監督が2010年3月18-20日まで札幌を中心に収集・制作活動をおこなうため来札された。思いもかけない事態に喜んで同行させていただいた。

最初の2日間は北海道大学の情報科学研究科の教室でワークショップを開催した。10名ほどの少人だったせいもあるが、直に伝わってくる密度の高いものになった。

発見！ ポーランド チェホフスキ 監督

ポーランド大使ロドヴィッチ女史からの
を札幌に派遣して下さったのだ。その

＜紙面タイトルはポーランド映画『アンナと

哲学者&作家 ヴィンツェンスの足跡

脚本・監督・撮影すべてご自身による作品『By ways of Vincenz (仮題:ヴィンツェンスの足跡を追って)』(57分)を上映した。ポーランドの作家&哲学者である「Stanislaw Vincenz(スタニスワフ・ヴィンツェンス)」(1888-1971)を貴重な映像と周りの人の証言で綴ってゆくのだが、個性の強烈さとあまりの精神性の高さにビックリ。「古代賢者のようだった」とか「座る姿はソクラテス」と当時を語る人もいた。

作品は神と人のつながりの根源、ウクライナや、フツル文化の研究などが中心に描かれている。映画を通してわずかでもヴィンツェンスとの＜対話＞を追体験できるならエピクロスの子のように人生を経験し、享受できそうな気にさせられる。宗教も人種も多種多様が彼の至上の価値だったことが良くわかる。

ヴィンツェンスは人生の大半は亡命者だった。晩年スイスに居を移す。「いつも山に惹かれていた」が、亡くなるまでフツルを忘れることなく懐かしんでいたことを周囲の人々の証言が物語る。しかし、亡命者の苦しみを背負うことなく、まったく逆に今いる場所に根を下ろしたひとでもあった。たぶん彼は欧州への帰属という問題を自ら解決したのではないかと思う。



ワークショップの会場で監督と

フツル人とその文化

フツリシュチナはウクライナの山岳民族で「誇り高く勇敢な」フツル人の居住する地域。

ここを舞台にしたものに小説『忘れられた祖先の影』(ムィハーイロ・コツェブィーンシクィイ著)があり、セルゲイ・パラジャーノフによって邦題『火の馬』(1964)が映画化されている。フツル人は過去にも多くの作

と過ごした3日間

プレゼントに感激！ドキュメンタリー監督
人は深く美しい映像を携えてやってきた・・・

『過ごした4日間』の題名を真似たもの。>



ワークショップに参加したポーランドの留学生と
監督（左1人目）筆者（右2人目）

家や画家にインスピレーションを与え、その生活が詩や文学、絵画に描かれている。

長年にわたって受けてきた分割統治という不自然な行政区分にも拘らず、何世紀ものあいだ地域に共通する独自の伝統的秩序、山岳条件、生活様式、羊飼いの法、畜産業、物質面と精神面に及ぶ文化、方言が養成されたのは驚異的なことだ。

「彼らは極めて普遍的だ。そこに人間の実存的経験の精粹があるから。ヴィンツェンス作品は再構成と創造の間、注釈と創作の間にある、人間の祖国が描かれるのであり“天と地”“神と人の共同体”としてホメロスの扱った世界である」と作品の中で学者が語る。ヴィンツェンスの乳母はツル人だったこともうなずける。

長きにわたる分割統治

1939年にはナチス・ドイツとソ連がポーランドを分割したことから、ポーランド領になっていたフツェリシユチナは大部分がソ連領となる。戦後も1950年代後半まで武力闘争で多くの村がその犠牲となり、1991年にソ連から独立したウクライナの領土となった。

この作品に闘争の映像はまったくないが、言葉からその輪郭もあぶり出される。「生の恍惚感」といえるようなものを感じるの、なぜだろうか。恍惚感「生そのものへの衝動」へと移行する。深い感動が内面に迫ってくる。

他のポーランド作品

『ダンスと二人の男』(1958)ポランスキ監督が在学中に撮った18分の短編も紹介してくれた。海から二人の男が大きいダンスを抱えて陸に上がって歩き回り、最後に海に帰っていくという不条理ともナンセンスとも映像詩ともいえる作品。また、Tomek BAGINSKI氏の『Fallen Art』(英国アカデミー賞最優秀短編アニメーション)は、謎と驚きを盛りこんだ作品だった。

目の当たりにした制作活動

最後の日は、江別市の「ドラマシアターどもIV」を訪問した。れんが造り3階建て(1922年築)旧江別郵便局舎を、現在は民間小劇場・喫茶店に。そこでロドヴィッチ大使の友人の霜田千代磨さんを監督に紹介した。霜田さんは寺山修司(天井棧敷主宰)が東欧公演のときサポートをされたほどのポーランド通。

舞台ではアコースティックな伝承音楽、ブルークラスをやっている大学生がギター、マンドリン、フィドルやバンジョーを手にリハーサルをしていた。また、監督は階下の炊事場でも長い間カメラを回す。薪ストーブや珍しい道具にくぎづけになる。かなり古い磁器の湯のみ茶碗が気に入らせていただく。

さらに水運が盛んな頃の倉庫群を利用したアートスペース「外輪船」へ。ホールピアノをみつけると、つかさずショパンの曲を弾く。近くに流れる千歳川を映すため、監督は一気に急勾配の土手にかけてあがった。アイヌ文化にも興味を示され、近くに住んでいる方



ピアノを弾くチェホフスキ監督

に連絡し語ってもらい撮影をした。着眼が新鮮で、かつ物凄い集中力と行動の人だった。

§

昨年、ポーランド国交樹立90周年を迎えた。

今年はショパン生誕200年にあたり、10月は5年に一度のショパン国際ピアノコンクールの年だ。

映画監督ではワイダ・ポランスキ・キェシロフスキを生んだシネマ大国でもある。アンジェイ・ワイダ監督は新作『スウィート・ラッシュ(英題)』で若さと死の対比、取り返しのつかない喪失を描いたという。現在、字幕をつけているそうだが、公開がとても楽しみだ。

氏間多伊子(文・写真=うじまたいこ)

私はこの 2 年間、ポーランドの西部の町、ポズナン市に住んでいる者だが、かつて北海道大学で学んでいたことから、札幌とも縁が深い。

また、東京外国大学のポーランド学科にいた時には、ポーランド政府の奨学金をもらい、1998 年から 2000 年にかけてクラクフ市に留学することができた。現在、ポズナン市の外国語大学で教えていながら、ポーランド人がいかに日本を見ているか、そしてポーランドがどのように変わったかを興味深く眺めている。そこで、変わりゆくポーランドの現在について報告を勧められた切っ掛けもあり、喜んで筆を執ったものである。

1. ティーンエイジャー

先日の金曜日、ポズナン市の中心街にあるマクドナルドに入った。参加しようと思っていたミサまでまだ少し時間があつたので、コーヒーでも飲もうと、教会近くの店舗に入ったのである。

レジには何本もの行列ができていた。かなり流行っている。コーヒーを受け取ると、広いホールを横切り、ガラスの壁の向こうに往来を眺める席に腰を下ろした。あちこちのテーブルで賑やかに談笑している客は、



ほとんどが十代と見える若者たち、あるいは子供たちである。友達同士で来ているようで、楽しそうにハンバーガーを食べている。もちろん、独りで来ている者もいる。遅めのランチを食べているのだろう。とにかく、家族連れはほとんど見られない。

メニューは、日本のマクドナルドと大して変わりが無い。値段は、ビッグマックの単品が 8.6 ズウォティ、セットが 14.1 ズウォティなので、1 ズウォティを約 30 円(2010 年 7 月現在)とすると、それぞれ約 250 円、420 円くらいの計算になる。東京ではビッグマックの単品が 320 円、セットが 650 円であるから、一見安いように見えるが、ポーランド人の平均的な月収を考えると、決して安くはないはずである。

ポーランド中央統計局の発表によると、2009 年のポーランド人の平均月収は約 3,000 ズウォティ、つまり 90,000 円前後となっているが、実際には、コンピューター・プログラマーなど一部の高給取りが月に 6,000 ズウォティあるいはそれ以上も稼いでおり、ほとんどの人は 1,500 ズウォティ前後の月収、中には 800 ズウォ



—— ポーランドだより ——

変わりゆくポーランド

ポズナン市在住の(当協会特派員?)が業を垣間みることで「ポーランドの経

テイほどの人もいるくらいである。

もう 10 年以上前の話になるが、クラクフの旧市街のフロリアンスカ通に初めてできたマクドナルドに入った時のことを思い出す。古都クラクフの一番の目抜き通り沿いという場所柄のせいもあつただろうが、当時の客は、家族連れが多かった。当時のマクドナルドは、家族と一緒に休日の夕食を楽しむレストランといった感じの場所だった。もちろん、独りで来ている者もあつたが、その場合もビジネスマン風の大人が仕事の合間にランチを食べているといった感じだった。少なくとも、子供たちが友達同士でやって来て、軽くランチを食べるような場所ではなかった。ポーランド中央統計局によると 1997 年の平均月収は約 1,000 ズウォティであるが、実際にその頃ポーランドで生活していた身としては、一か月 700 ズウォティぐらいで生活していた人がほとんどだったように思う。



ポーランドに最初のマクドナルドができたのが 1992 年である。以来これまで、ポーランドに関する面白いエピソードとして「マクドナルド＝高級レストラン」という図式がたびたび語られてきた。

しかし、最近のマクドナルドを見ながら言えることは、経済的に裕福な家庭が確実に増えているということ、その結果として、そうした裕福な家庭の子供たちが友達同士で気軽に食べに行けるようになっているということである。1989 年の民主化以降ポーランドが歩んできた政治的・経済的な路線と、そこから来る変化とを改めて実感した。

2. 金曜日

私が驚いたのは、客のほとんどが十代の若者たちで、しかも友達同士で気軽にハンバーガーを食べていたことだけではない。加えて、その日が金曜日だったことである。

ポーランドがカトリック教徒の国であることはよく知

のファースト・フード

ら届いたホットな情報！それは「外食産
済がわかる」とても興味深いものでした。

津田 晃岐

られている。国民の 90 パーセント以上が洗礼を受けており、ローマ・カトリック教会の定める聖人にちなんだ名を持っている。

ローマ・カトリック教会では、毎週金曜日を小斎の日と定めている。小斎というのは、鳥獣の肉を食べない食事制限のことで、イエス・キリストが十字架にかけられた金曜日に、その受難を記念して行われる。



毎週金曜日の小斎の習慣は、現在でも残っている。ポーランドでは普段魚を食べることはほとんどないのだが、例えば会社や学校の食堂では、金曜日には肉料理ではなく魚料理が出されることが多い。またミルク・バー (bar mleczny) など街の食堂でも、金曜日の「日替わり定食」は魚料理のことが多い。もちろん金曜日でも、メニューにあれば、肉料理を注文することはできる。

ただし、この小斎の習慣は、今ではかなり形骸化しており、少しずつ消えようとしている。公共の食堂でこそまだ名残を留めているものの、それらの場所でも決して食べられないわけではない。また、各家庭の食卓となると、果たしてどれだけ守られているものか分かったものではない。現に、まったく気にすることなく、金曜日にも肉食している人はたくさんいる。



昔からの「伝統」という程度で、小斎に対して特に反発もしないが、かといって積極的に守ろうと努力する必要までは感じない。そうした傾向は、もちろん若い世代ほど顕著だが、しかし年配の人たちの中にも、現在ではかなり強く見られる。

そういうわけで、金曜日であろうとなかろうと関係なく、ハンバーガー屋のレジには行列ができています。「カトリック教徒の国」ポーランドで、金曜日のハンバーガー屋で行列が見られるということは、資本主義を積極的に導入してきたポーランドの精神的な変化をも、つまりポーランド人がカトリック教から少しずつ離れていることを物語っている。

3. 多国籍

有名なシンガーソングライター、クシシュトフ・ダウクシェヴィチは 2000 年に「ドライブ・スルー」の中で、ポーランドの「発展」をアイロニカルにこう描いている。

チェンストホーヴァまで辿り着いた。
そしたらマクドナルドが 2 軒立ってた。
ドライブ・スルー、ドライブ・スルーよ！
なんて見事に発展してるんだ、この国は！

チェンストホーヴァというのはポーランド国内最大の聖地で、そのヤスナ・グラ寺院には、ポーランドの守り神として信仰を集めている「黒い聖母」像がある。現在でも巡礼が絶えることはなく、毎年 8 月 15 日の聖母被昇天の祝日には、全国から徒歩で巡礼者がやって来る。そんなポーランド人にとっての精神的な中心地にも、マクドナルドが既にあり、しかも主人公がその恩恵を享受しているところに、この歌のおかしみがある。



この歌が発表された頃には、皮肉の対象として、まだマクドナルドしかなかったのかもしれないが、現在のポーランドでは、実に様々な国籍、経営形態、資本のファースト・フードが見られる。

中でも、今ポーランド人に最も人気のあるファースト・フードは、オリエンタル料理だろう。例えば、炙って削ぎ落とした肉を野菜と一緒にパンに挟んだ中東料理などが、露店や個人経営の店で売られている。また、アジア料理の露店も、例えばワルシャワなど、地域によって見られる。

一方で、昔ながらのミルク・バーも存続しているが、現在では「ミルク・バー」と呼ばれることは稀で、それぞれ独自の店舗名を冠している。

さらに、伝統的なピエロギ専門店や、カトリック教会の慈善団体「カリタス」が経営する食堂も残っている。

ハンバーガーやフライドチキンだけでなく、ポーランド人にとってオリエンタルな料理も含めて、ポーランドの食文化の多国籍化が進んでいる。提供される味の多国籍化が進んでいると同時に、それを消費するポーランド人の味覚も多様化している。そして、この傾向は、今後も続いていくだろう。EU に加盟したポーランドは、他の国と同じように、「グローバル化」という名の「発展」をし続けていくだろう。そしてそれに伴い、「グローバル」なファースト・フードの味にポーランド人が馴染んでいき、私の覚えている古き良きポーランドらしさが少しずつ薄れていくのが残念でもある。

つだ みつてる (ポズナン外国語大学講師)

コンサートを終えて

ウィリアムス 美由紀

去る 6 月 18 日金曜日、札幌サンプラザホールに於いて、会員による恒例のコンサートが開催されました。

今年 2010 年は、ポーランド生まれの作曲家、ショパンの生誕 200 年の記念の年ということもあり、第一部はピアノソロによるショパンの名曲をお届けしました。

第二部では、ポーランド出身の作曲家のみならず、ポーランドにゆかりのあるバラエティに富んださまざまな作品を、ピアノデュオで聴いていただきました。



第三部では、長内勲先生指揮による『男声合唱団 ススキーノ』の皆さんが、ポーランド国家をはじめとするポーランドの歌曲をはじめ、盛りだくさんの曲を披露してくださり、コンサートを盛り上げてくださいました。

ポーランド出身の作曲家と言えば、あまりにもショパンが有名なので、なかなかその他の作曲家にスポットライトが当たることがありませんし、実は選曲もなかなか難しいところがあるのです。それでも、少しずつまだあまり知られていない作曲家の作品を、このようなコンサートでご紹介できることは大変有意義なことではないかと思えます。ご協力頂いた関係者各位に心よりお礼申し上げます。

— 札幌における —

ポーランドの文化を感じた日

ヴァルデマール・ヤロスラフ・ダブロフスキ

2010 年 6 月 18 日、北海道ポーランド文化協会主催の毎年行っている音楽コンサートが札幌サンプラザホールで開催された。後援は駐日ポーランド共和国大使館や札幌市をはじめ日本ショパン協会北海道支部など多数。

今回はこのコンサートに歴史上初めて、男性合唱団「ススキーノ」が出演した。

男性合唱団「ススキーノ」とは

在札幌ポーランド人である私は、その「ススキーノ」のメンバーのひとりである。この男性合唱団は 6 年前に設立され、当初は 11 人のメンバーで活動を始めたが、現在、在籍者リストには 24 歳から 73 歳までの 71



後方中央で歌う筆者（ナルディックさん）

名の名前が掲載されている。ほとんどが楽譜すら読めないこのアマチュアグループの指揮をとるのは、年齢は 67 歳だが、まるでティーンエイジャーのようなエネルギーをもった北海道教育大学岩見沢校名誉教授である長内勲氏である。

「ススキーノ」は北海道で最大の男性合唱団であり、さらに日本全国でもっとも大きなもののひとつである。アマチュアの合唱団なので、「ススキーノ」は、指揮者とピアニストを除き、出演料を受け取らない。

今回は、在東京のポーランド大使ヤドヴィガ・ロドヴィチ氏がポーランド共和国大使館の文化部の予算から費用の一部を援助することを個人的に許可してくださった。

コンサートのプログラムでは、ショパン以外にもほかのポーランドの作曲家や外国の作曲家の曲も聴くことができた。

「ススキーノ」はポーランドの作品と日本の作品を混ぜて歌い、自分たちの出演の最初と最後にドゥブロフスキのマズルカを持ってきた。このポーランド国歌を最初と最後に 2 度演奏する間に、会場に集まった観客たちは、ポーランド民謡の「森へ行きましょう」*や日本の古い軍歌に日本人の作者がポーランド語で歌詞をつけた曲「波蘭懐古」*と、さらには日本の曲を歌った。

日本の曲は大部分が札幌と北海道に関連したものであった。

Concert ◆ ショパン生誕 200 年記念 ◆ 北海道ポーランド文化協会 ◆ Concert

困難を極めた練習

このコーラスに関して言えば、コンサートの準備は 2009 年末に始まった。その時、コーラスの指導部は 6 月のコンサートへの招待を受け入れることを会議の中で正式に決定したのだった。合唱団は、このコンサートでポーランド協会のピアニストたちの素晴らしい演奏の後に出演することになっていた。

～ 初めてのポーランド語 ～

そしてコンサートはショパン生誕 200 周年を記念したものであったので、私はその準備にあたった。というのも合唱団はほとんどいつも日本人の観客の前に立ってきたので、これまで一度としてポーランド語の作品をレパートリーに入れたことがなかったからである。

～ なかなか届かない楽譜 ～

さらに楽譜を手に入れ、言葉の問題を克服することはとても困難であると明らかになった。ポーランド語は発音の点では、現存する言語の中でもっとも難しいもののひとつであり、日本人の大部分にとって学習することはもちろん容易ではない。

楽譜の入手は、ポーランド大使館の文化部も少しは援助してくれたが、それでもこれだけテクノロジーが発達した時代で 3 ヶ月以上もかかり、最終的にはロドヴィチ大使も全面的な協力をしてくださった。楽譜がコーラスの指導部に届いたのは、ようやく 2010 年の 3 月末のことだった。



長内勲氏の指揮により、美しい歌声を披露してくれた男性合唱団「ススキーノ」の皆さん

「ススキーノ」は毎年 5 月に北海道銀行主催のチャリティコンサートに参加している。したがって札幌のポーランド文化の日のコンサートの準備は、このチャリティコンサートの後によりやく始まった。3 つの曲のメロディを覚え、ポーランド語のしかるべき発音を習うためにコンサートのメンバーに残されていたのは、たった 5 回の練習のみだった。

～ そして発音 ～

「ススキーノ」の中ではポーランド語を話せる唯一のメンバーだった私は、この重要な問題に対処することを余儀なくされた。「ススキーノ」の合唱団員は平均年齢は 60 代なので、この企ては容易ではない課題だった。

出演に関するこれらすべての問題にもかかわらず、合唱団員は、「イエシュチェ」、「デシュチュ」、「ズ・ジェーミ」といった言葉に舌を噛みながらもストイックな落ち着きを持って臨み、最終的にはオリジナルの発音に近い音を出せるまでになったのだった。

◆ Program ◆

I 『ソロ』

ボレロ/スケルツォ/バラード(すべて F. ショパン)

II 『デュオ』

ソナタ (F. ショパン=C サン=サーンス)

大都会 (A. タスマン)

ワルソーコンチェルト (R. アディンセル)

パガニーニの主題による変奏曲

(W. ルトスワフスキー)

III 『男性合唱団 ススキーノ』

ポーランド国家

波蘭懐古

森へいきましよう

上を向いて歩こう

北海道賛歌メドレー(時計台の鐘・知床旅情/

虹と雪のバラード/雪の降る街を/この青空を/宗谷岬)

◆ プログラム・ノートから ◆

※「森へいきましよう」 原題は「娘さんが森へ行った」ということから、レクリエーション・ソング調に作詞したもので、その内容は原詩のハンサムな狩人に対するたあいのない愛の歌とはおよそかわりがない。原曲は、ポーランドで“マゾフシェ”とならぶ民族合唱舞踊団の双璧とされる“シュロンスク”のおはこであることと、方言のその地方の民謡と思われるが、今ではポーランドでも全国的に愛唱されている。よく知られ、歌われている曲ではあるが、もとはポーランド民謡である。

※「波蘭懐古=(ポーランドかいこ)」 明治 26 年(1893 年)発表の作品。在ドイツ公使館付武官の福島安正が日本へ帰国の際、馬でドイツのベルリン、ポーランドのワルシャワ、モスクワ、ウラル山脈越え、シベリア、蒙古、北満州を経てウラジオストックに至る 4 カ月間を題材にした長篇詩を、国文学者の落合直文が作り、その内のポーランド通過の部分を取ったもの。作曲者は不明。

富山 信夫(写真撮影=とみやまのぶお)



2009-2010年度 総会のご案内

- 日時：2010年10月31日(日)
- 場所：かでの2・7 510会議室
(札幌市中央区北2西7 TEL 011-231-4111)
- プログラム：

13:00～ 総会
14:00～ 懇親会

オモシロイ催しなども企画中！
後日、「往復はがき」を郵送する予定です

- ① 出席の方は参加人数を記入し、欠席の方は返信ハガキ(委任状)にご記入の上、投函してください。
- ② 懇親会では、お子様、ご家族での参加、ご友人をお誘い合わせのうえお越しください。
楽しいひと時を過ごしましょう！

ポーレ原稿 大募集！



会誌「ポーレ」では皆様からの原稿を随時募集しています。

- 旅の思い出
- 友人との交流
- 好きな映画
- 好きな作家

ポーランドに関することならテーマ、字数は自由ですので、ぜひ皆様の素晴らしいポーランド体験を教えてください。執筆のご連絡は事務局まで。

北海道ポーランド文化協会の 運営に携わりませんか？

10月から本協会の運営にご協力いただける方を募集しています。

例会などの催しの企画、会報「ポーレ」の編集などを一緒にやりませんか？

会員の皆様のアイデアを積極的に活用していきたいので、ご興味のある方はぜひ事務局までご連絡ください。



札幌市市民活動サポートセンターに 登録しました。

市民活動サポートセンターは、札幌で活動しているボランティアやNPO団体など、さまざまな分野の市民活動団体を支援する総合拠点です。

登録することにより、会議・打ち合わせコーナーやパソコン、印刷機器などを利用できます。

助成金情報や団体同士の交流など、今後の当協会の活動も広がります。

運営委員会や編集委員会での利用も考えています。

【交通案内】札幌エルプラザ2階(北区北8西3/有料駐車場有)札幌駅北口地下通路12番出口から、建物の中に直結です。

会費の納入はお済みですか？

(2009年10月～2010年9月分)

当会は、皆様からの年会費によって運営されています。上記の年度分の会費の納入を至急宜しくお願いいたします。



POLE

第67号
ポーレ編集委員会

氏間多伊子
栗原朋友子
小林 美保
越野 剛
佐光 伸一
鳴神 雅史
ラファウ・ジェプカ

総会会場での
納入も
申し受けます。



【郵便振替口座】
02740-5-19735
北海道ポーランド文化協会

- ◆普通会員(年額)3000円
- ◆維持会員(年額1口)5000円
- ◆学生会員(年額)1500円

北海道ポーランド文化協会会誌

POLE 第 67 号 (2010 年 9 月)

目 次

安藤厚「[第二代会長] 谷本一之先生の一周忌によせて」	1
氏間多伊子「発見！ポーランド～チェホフスキ監督と過ごした3日間」	2
津田晃岐〈ポーランドだより1〉「変わりゆくポーランドのファースト・フード」	4
ウィリアムス美由紀「[ショパン生誕 200 年記念] コンサートを終えて」／ヴァルデマール・ヤロスラフ・ダブロフスキ「札幌におけるポーランドの文化を感じた日」	6
[事務局より][第 24 回] 総会のご案内、札幌市市民活動サポートセンターに登録	8